

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方におかれましては、令和 5 年という輝かしい年をご家族揃ってご壮健にてお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

また、昨年は、皆さま方には、住民福祉の増進、町政進展のために職務に精励いただき感謝申し上げます。

お陰様で、これまで地道に取り組んできたまちづくりの努力が、着実に成果をあげ実を結ぶことができた 1 年であったと思います。

コロナ禍において多くの事業が、中止、延期となりましたが、顕著な成果をあげていただいた皆さんを本日表彰させていただきます。

表彰される皆さんに心から感謝申し上げます。

そして、私ごとになりますが、昨年 1 2 月に行われた町長選挙において無投票での 4 選を果たすことができました。

政治家は、4 年に 1 度、これまでの実績と未来へのまちづくりへのビジョンに対して、住民の皆さまからの審判をいただくことは宿命であり、それ故に、4 年間全力で走りつづけてきました。

今回は、無投票当選で具体的な得票数は数字に表れていませんが、一定の信任をいただいたものと考え、引き続き住民の皆さまにご提示させていただいたマニフェストに基づき、一方で、そのマニフェストへの議会、住民、職員の皆さまのご意見も取り入れながら深化させ、町政進展、住民福祉の増進に向けて尽力してまいります。

私に与えられた新たな 4 年間については、「士は以て弘毅ならざるべからず。死して後已む」(士は度量がひろく意志が強固でなければならない。全力を尽くして死ぬまで事に当たる。)という強い志と情熱と覚悟をもって、まちづくりに

取り組んでまいります。

一方で、初心にかえり今まで以上に住民の皆さま、職員の皆様のご意見を真摯に聞いていかなくてはいけないと考えています。

「成功は毎（つね）に窮苦（きゅうく）の日に在り、失敗は多く得意の時に因る」（邱永漢）とあるように、私自身が自ら戒めなくてはいけないことは、無投票4選を果たしたからこそ、驕らず慢心せず多くの皆さんの声に真摯に耳を傾けることにあります。

良い町を創るためには徹底した熱い議論が必要であることは言うまでもありませんが、「過ちて改めざる、是を過ちという」とあるように、皆さんからの忌憚ないご意見をお聞きし、私自身も過ちがある時は正していきたいと考えています。

さて、新型コロナウイルス感染症拡大から3年になろうとしています。この間、職員の皆さんには感染症対策にご尽力いただき住民の皆さまの命と健康、そして生活をお守りいただきました。心から感謝申し上げます。

しかし、依然として第8派の中で、感染者数は高止まりの状態が続いています。今年こそは、コロナが終息し、平穏な日常が戻ってくることを願ってやみません。

そうした中で、新しい年を迎えました。

コロナとの戦いは最優先課題としながらも、少子高齢、人口減少社会を迎え、子育て支援や高齢者福祉政策、公共施設の更新、今後想定される財政支出を念頭に置いた行財政改革など行政課題は山積しています。

主要事業としては、教育センター設置による三芳教育の充実、共生社会の

まちづくり、SDGsのまちづくり、芸術文化のまちづくり、関越自動車道三芳PAスマートICフル化、藤久保地域拠点施設等整備事業の事業者選定と本格的スタート、世界農業遺産・ガーデンツーリズムの認定、第6次総合計画をはじめとした三芳版スーパーシティ、ゼロカーボンシティ、フォレストシティ構想など未来の三芳町のまちづくりへ向けた各計画などの策定があります。

こうしてみると、今年は、昨年3月に町政施行50周年を迎え、まさに町政100年に向けたまちづくりの基盤を創る大事な1年になろうかと思えます。

「毫釐の差は千里の誤り」(わずかな違いが大きな誤りをもたらす。礼記)とあるように、職員の皆さまの叡智を結集して、熟慮に熟慮を重ね未来のまちづくりのビジョンを策定する時です。

一方で、プラネタリー・バンダリー(地球の限界)はひたひたと迫ってきています。人類の社会経済活動が、産業革命以降加速度的に拡大され、私たちが地球上で安全に生存できる限界を超えようとしています。

私たち人類は、青く美しく輝く地球で共に生きています。未来の子どもたちに、この青く美しく輝く地球を、ふるさと三芳を継承するのが私たちの使命です。

グローバルな視点に立ちながらも、ローカルな三芳町の問題に取り組んでいくことが重要です。

それは、明日ではなく、来年でもなく、10年後でもありません。

今、今日できることを、未来を見つめた眼差しと深い熟慮と同時に、1分1秒をもおろそかにしないような行動を小さくとも積み重ね実践していくことです。

「当下一念」

今を一生懸命生きることです。

江戸時代初期に近江聖人と言われた陽明学者中江藤樹の言葉です。

「悔やむなよ ありし昔は 是非もなし ひたすら正せ 当下一念」

自分に与えられた場を正しく受け止め、最後まで全力を尽くすこと。

過ぎ去った昔の事や、未来の不安に心を囚われず、今に集中することで、新たな道が必ず開けてきます。

「熟慮と行動、そして、今を生きる、当下一念」という生きる姿勢がまちづくりに求められています。

現在、策定中の第6次総合計画では、「幸せ(well-being)」がキーワードとなっています。

私のマニフェストでも「誰一人取り残さない 幸せのまちづくり」として35の宣言を掲げさせていただきました。

アフターコロナのまちづくりは、一人ひとりの幸せの実現がまちづくりの指針となります。

そして、それは職員の皆さん一人ひとりの幸せを実現することでもあります。

「well-being (ウェルビーイング)」とは、直訳すると「良い生命(いのち)」であり、well-being の定義においてよく引用されるのが、WHO (世界保健機関) 憲章の前文の一節です。

そこでは、well-being は、肉体的、精神的、社会的に満たされた状態をいいます。

職場においても価値観が多様化し、働き方改革が推進され、さらには新型コロナウイルス感染症の拡大で well-being に注目が集まっています。

しかし、「幸福」については well-being の定義以前に、これまで多様な解釈がありました。

三大幸福論と言われるヒルティ、アラン、ラッセルの幸福論、オルポート、マズロー、フランクフルトなど人格心理学、ロゴセラピーからのアプローチによる幸福論、さらには、洋の東西を問わず宗教的な境地としての幸福論。

しかし、ここでは「幸福」の定義について学術的な検証を行う場ではありませんし、幸福についてお話したとしても多様な解釈の中の一解釈にしかすぎません。

WHO の提唱する肉体的、精神的、社会的に満たされた状態を前提にしながらも、一解釈ですが幸福について考えるヒントが広報みよし 1 月号での対談でありました。

広報みよし新春号では、平成生まれの若人と対談しました。

ダンス、ゴルフ、フルート、イチゴ栽培と、自らの夢に向かってチャレンジしている 4 人でした。

その瞳は、未来を見つめ、輝いていました。

それぞれが様々な困難や課題を抱えながらも、それに立ち向かい、克服せんとする強い意志と明るさをもっていました。

「今が充実し、楽しい」

異口同音の答えが返ってきました。

彼らの瞳の奥に秘められていた幸福のキーワードは、「夢」「希望」「克己」「挑戦」でした。

「夢」や「希望」は、それぞれの生きる目的であり、存在の意味とも受け止めることができます。

その生きる目的、自身の存在の意味を探求しながら、夢に向かって自身に打ち勝ち、困難を乗り越え挑戦する姿は輝き、「幸福」に満たされているように感じました。

1991年、今から32年前、フィリピンマニラ市郊外のスモーキーマウンテンというゴミの山でゴミを拾い生活していた少女、20世紀最大と言われたピナツボ山火山噴火で被災したアエタ族の少年。

二人とも貧困と被災の中で生死の狭間で生きていました。

彼らに「バタ アノアン パガラップ モ」(ねえ 君の夢は何に)と尋ねました。

返ってきた言葉は、「看護師になってお母さんを助けてあげたい」

「パイロットになりたい」と輝く瞳で答えてくれました。

私自身、当時は生きる意味を追い求め、長く暗いトンネルの中で、日々悶々と過ごしていた時でした。しかし、その輝く瞳は、一縷の光となって私の心を照らし、私の人生が変わった瞬間でした。

広報みよし新春対談での4人の輝く瞳と、スモーキーマウンテンの少女、アエタ族の少年の輝く瞳は同じでした。

「夢」「希望」「克己」「挑戦」、さらには「お母さんのために」という「利他の心」の中に幸福を見いだすことができるのではないのでしょうか。

昨年、8月に亡くなられた経営の神様と言われる稲盛和夫氏。享年90歳。

86歳の時のインタビューで

「人生で一番大事なものは何だと思われますか」との質問に

「一つは、どんな環境においも真面目に一生懸命に生きること。

自分が自分を一つだけ褒めるとすれば、どんな逆境であろうと不平不満を言わず、慢心せず、今、目の前に与えられた仕事に、それがどんな些細な仕事でも、全身全霊で打ち込み努力してきたこと。

もう一つは、利他の心。

皆を幸せにしてあげたいと強く意識し、生きていくこと」と答えています。

そして、別の所では

「仕事に打ち込んで、世の中に役に立ち、自分自身も幸せだった。と感じられる生き方が、時代がどう変わろうと、最終的にはみんなが求めているものではないかと思います」と話しています。

「誰一人取り残さない 幸せのまちづくり」

本年は、住民の皆さま、そして職員の皆さんの幸福の実現にコミットしたまちづくりを推進していきますが、一方で、4人の若人、稲盛和夫さんの言葉からも、幸福は与えられるものではなく、幸福は自分自身で掴むという側面もあるのではないかと思います。

自明のことかもしれませんが、与えられた環境の中で精一杯真面目に努力すること、そうすると必ず道は開ける。

そして、自らの夢や目標に向かって、己れに打ち勝ち果敢にチャレンジする。さらには、私利ではなく利他の心をもって生きていく。

人生は、運命という縦糸と因果の法則という横糸で織りなされ、人生を形作っていると言われています。

どうにも変えようのない自身が生まれた時代や環境という運命。

しかし、人は人生で様々なことに遭遇して生きていきます。その時に、人は善いことを思ったり、善いことを実行したりします。それによって人生は良い方向に変わっていく。そのような「因果の法則」があると言います。

自分の意志と行動で人生は変えることができるのです。

ここに幸福への道があるように思います。

あらためて職員の皆さんには、自身の人生と仕事について「幸福」をキーワードに考えていただき、充実した1年であることを願っています。

皆様方の今年1年のご健勝とご多幸をご祈念いたしまして、年頭のあいさつ
といたします。